



## Topics

### 長崎みなとメディカルセンター 市民病院と人材育成に向け調印

長崎みなとメディカルセンター市民病院と当院の人材育成等に関する調印式が1月26日、行われました。その一環として、当院（回復期）のスタッフが長崎みなとメディカルセンター市民病院（急性期）で、長崎みなとメディカルセンター市民病院のスタッフが当院で、相互に研修を行います。



急性期病院と回復期病院間の関係を深めることで、より質の高いリハビリテーションを切れ目なく提供します。また、たとえ障がいがあっても、住み慣れたところで暮らしていくための支援ができる人材を育成していきます。

### 管理栄養士、西岡心大が 難関LLLの卒業試験にTOPで合格



管理栄養士、西岡心大が第36回ESPEN（ヨーロッパ臨床栄養代謝学会）で行われたLife Long Learning（LLL）の卒業試験に合格しました。

LLLは、ESPENが開発した教育プログラムで、世界中の医師、管理栄養士をはじめ臨床栄養に関わる27,000名以上のメディカルスタッフが受講しています。しかし、これまで卒業試験に合格しESPEN-diplomaを獲得したのは、世界で200名にすぎません。日本人

合格者は第34回ESPENで合格した高増哲也医師（神奈川県立こども医療センター）1人でした。今年は17人が卒業試験に合格し（内2人が日本人）、西岡心大は100点満点中95点というトップの成績でした。

## Information

### 銀屋の「恋するフォーチュンクッキー」YouTubeで公開

「恋するフォーチュンクッキー」の「長崎リハビリテーション病院・在宅支援リハビリテーションセンターバージョン」と「銀屋町界限バージョン」を制作し、YouTubeで公開しています。

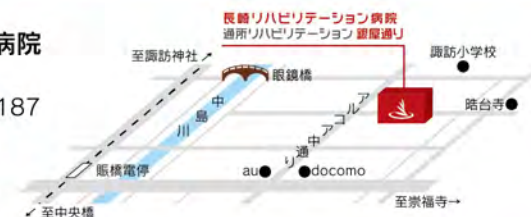
「銀屋町界限バージョン」では、「互いに声を掛け合い、支えあいまちづくり」をテーマに、「障がいがあっても、階段・坂道ばかりでも、赤ちゃんからお年寄りまで楽しく暮らすために、みんなで力を合わせましょう!」というメッセージを込めて、年齢も職業も立場も様々な方々、多くの企業のご協力のもと制作しました。

是真会 YouTube

検索

### 編集後記

通所リハビリテーション銀屋通り取材していると、みなさん結構な運動量をこなされているのがわかります。継続は力なり。オープン直後にお見かけた時より言葉が出ている方、歩くスピードが速くなっている方に驚かされ、自分の運動不足を反省しました。（西）



# 地域の新たなコミュニティを目指して

Series 理事長鼎談

## 栗原正紀

理事長



医療も介護サービスも地域を支えるためにある

## 永田末信

銀屋町自治会長



長崎の人口減少をなんとかして欲しい止めたい

## 高木忠弘

銀屋町鯨太鼓保存会代表



子どもに郷土の歴史を教える仕組みが必要

### 「2025年問題」を迎える前に長崎はあと数年で危機的状況に直面する

**栗原** 10年後の2025年、いわゆる団塊の世代（第一次ベビーブームの世代）が75歳以上になるために、大量の要介護者が見込まれています。ところが一方では、少子化が続きますから就労人口がますます減少し、支えるマンパワーとともに国の財源がまた足りなくなってしまうのです。このままでは、大変な事態を招くことが予測されます。

**永田** あと10年ですか？

**栗原** 高齢化率で言うと、長崎はあと数年です。東京が30%を超える前に、長崎では、とうに超えてしまっているわけですね。そのような事態を迎える前に、なんとして、みんなが一丸となって有効な手を打っておかなければならないのです。

これからの時代、医療に携わる、特にうちみたいなりハビリテーション専門

いるということだと思えますよ。

**栗原** 何とかしないと、みんなが心の拠り所さえも失ってしまいますよね。

病院では、病院を運営すればそれでいい、患者さまがただでは済まないと考えています。退院されたあとまで安心した地域生活ができていくかどうか、しっかりと支援していくことが重要と考えています。そのために昨年、病院の隣に在宅支援リハビリテーションセンターを立ち上げました。その施設と人材を、地域を支えるために生かしたいと思っています。

地域により積極的に出ていき、関わっていききたい。今まで以上に、しっかりと貢献しますよ！というメッセージです。

ところで、私どもの想いは一旦、置いて、永田会長が生まれ育った、この銀屋町は、昔はどんなところだったのでしょうか？

**永田** 子どもの時分は、商業地区といっても静かな

長崎リハビリテーション病院と在宅支援リハビリテーションセンターのある銀屋町の町名は江戸時代、銀細工職人が住んでいたことに由来します。諏訪神社秋の大祭「くんち」に奉納する鯨太鼓を創設し、一度は消滅した町名を復活させた立役者、銀屋町自治会長の永田末信氏、そして銀屋町鯨太鼓保存会代表の高木忠弘氏とともに、理事長の栗原正紀が銀屋町の魅力や地域のコミュニティについて語り合いました。

### 談 鼎 テーマ

#### わが国のコミュニティの歴史的变化を考える

#### 日本人が大昔から育んできた

#### コミュニティが大戦を境に崩壊を始めた

**栗原** わが国の歴史をひもといてみると、奈良・平安の時代、すでに村々にみんなを守るべき鎮守の杜があり、お祭りが催され、村人が一つに結束していたといわれています。そのような社会構造が、わが国には昔からあったのです。その、いわゆるコミュニティ（共同体）といわれるものが、だんだんとなくなっていくことを危惧しています。

**高木** ここ銀屋町でも、古くからお稲荷さんやお大師さんが大切に祀られています。

**栗原** アメリカに行つて驚いたのは、教会を中心にして地域のコミュニティがしっかりと形成され、機能していることでした。

日本では、戦争を境に人の心がバラバラになってしまい、鎮守の杜のお祭りも、ごく一部の人が踏ん張って守っているのが実情ではないでしょうか。

**高木** その通りだと思います。

**栗原** つい最近も、独居老人が亡くなって2週間して発見された」というニュースが長崎でありました。地域社会の中で、お年寄りが孤立している構造が生まれています。

**永田** 確かに銀屋町境界

町でしたよ。病院が結構多い町だったんですよ。でも最近ね、駐車場が多い町になってしまった。

**栗原** 寂しいですねー！もう行政を頼りにしても始まりませんから、地域の人みんなでスクラムを組んで立ち上がり、あの手この手

とチャレンジしていかないと、このあたりはほとんど廃れていく一方じゃないでしょうか。

**高木** 確かに、そこに行き着くと思いますよ。残念がったり、寂しがっていても、どうにもならないですよ。何かすべきですよ。

### 談 鼎 テーマ

#### ふるさと長崎の伝統文化「くんち」を守り伝える

《昭和41年、長崎市の町名変更によって銀屋町の町名が廃止されたことに伴い、7年に1度の踊町の「くんち」奉納が中断することになった。由緒ある町名を取り戻すために、地道な運動を続けた結果、昭和60年、くんち奉納が復活し、平成19年には、40年ぶりに銀屋町の町名が甦った。その原動力となった人物が、永田・高木の両氏である》

#### くんち奉納の復活ののろしは、

#### 長崎大水害の復興運動が一つのきっかけ

**高木** ずいぶん昔になりませんが、銀屋の町名が消滅し、くんち奉納も中断することになりました。そこに、踊町復興運動ののろしを上げたのは、昭和57年の長崎大水害がきっかけでした。

**永田** 水害のときは、その中島川が増水・氾濫したので、この限界も、ほとん

ど世帯が冠水して、惨憺たる有様でした。

**高木** 銀屋町の町印である傘鉾も水に浸かったんです。手入れをしていたときに、傘鉾の管理をされていた、ある名家の女性から「こ

がんよか傘鉾のあつとに、くんちに何も出さくらんとか」って、町の若いもんが

発破をかけられたんです。この言葉に皆が発憤したんですよ。

**栗原** 鯨太鼓をやるにあたっては結構、議論があったのではないのでしょうか。

**永田** 「どうせやるんだったら凄いものを出したい」という高木君の提案に、初めは、「本当にできるのか？」という話でした。しかし、和太鼓を取り入れた鯨太鼓の形をしっかりと作ったんですね。まさに、くんちの申し子ですよ。

**高木** いえいえ。今とは景気が違いましたし、確かにエネルギーがありました。そして、二度とこのような惨禍（長崎大水害は死亡・行方不明者299人を数えた）を繰り返してはならないという、町民一人ひとりの祈りが踊町復活を実現させたんです。

**栗原** 昨年のくんちには、私も含め、うちの連中も参加させていただきましたが、地域のことが大事だということ、身を以て感じることでできました。そして今は、地域のために、もう一踏ん張りしなければという気持ちでいます。

### 「くんち」を体験し人はたくましくなる

**永田** 子どもを教育するには、くんちが一番と昔から言ってますよ。僕が子どもの頃、銀屋町の演し物は本踊りと奴道中でしたが、これに出たくてしようがなかった。踊町が回ってきたとき、すでに中一になっていたものだから、小学生じゃないとダメだとなって、出られなかった。

今の子どもたちにとっても、くんちに出ることは憧れですよ。練習の過程で、子どもは、大人から厳しく指導されるんですが、上下関係や社会秩序、礼儀作法までたたき込まれます。このくんちを経験して、子どもたちは一回りも二回りも



たくましくなるんですよ。

それから、くんちの踊町では、犯罪の発生件数が非常に少ないという統計があるんですよ。

**栗原** 高木さんは、小学生や中・高校生に郷土の歴史やくんちについて教えておられるそうですが、まさに語り部ですね。

**高木** 長崎には大事なものがいっぱいありますが、学校で教えるだけでは無理だと思えます。幼児の頃から、郷土の歴史をしっかりと教える仕組みが必要です。学力も大事だけれども、

それ以外に郷土のことを知り、町のいろいろなものに触れることで、郷土を愛する心、それがひいては、国を愛する心につながるのではないのでしょうか。

**栗原** くんちに参加できない人も、知識があれば、郷土の伝統文化を守ることもできる。くんちを通して、お年寄りや子どもたちに声をかけ合うことのできるコミュニケーションも生まれてくる。地域の皆さん同士、おい、コラの信頼関係で結ばれれば良いなと思っています。

### 談マ 鼎テ

### 地域のコミュニティ再生へ地域一丸となって挑戦する

### お年寄りの豊富な知識と経験を役立てる活気のある社会を目指していきたい

**栗原** 今の世の中は情報が氾濫していますが、何が大事なのかを判断する足元がしっかりしていません。核家族になって、爺さん・婆さんと一緒に暮らしていないから、大切なことが次の、そしてまた次の代まで伝わっていかない。料理にしても、味噌汁の味にしても、そう。

それはどうしてかと言うと、戦後、日本はお年寄りを祭り上げてしまったからだと思います。その結果として、お年寄りの活躍する場がなくなってしまう、お年寄り自身も、誰かに何かをしてもらうという受け身の姿勢になってしまった。もう一度、お年寄りの豊

富な知識と経験を活かせるようにしないといけない。

お年寄りは地域の財産ですから、家の中に閉じこもっていても、もったいない。

お年寄りの果たす役割が見えてくると、お年寄りが元気になる。そうなる、もっと活気のある地域社会

### 外国の食材も取り入れる長崎の庶民料理は奥が深い。このよさを伝える場づくりだけでも、すてきな題材になると思うのです。

**栗原** わたしたちの病院では、以前入院されていた患者さんが、先輩として「マヒがあっても料理が作れるよ」と後輩の患者さんに教える料理教室を開いています。食べたものが、なんでもすぐに手に入る今の時代、子どもたちにも、楽しく料理することは、栄養価の面でも、郷土を大切にするうえで、いいことなんだと教えないといけない。

それが、銀屋町の歴史だったり、長崎の郷土料理だったり、いろんなことを教えるきっかけにもなると思います。

高木さんは、郷土料理のことに、とても詳しいと聞きましたが。

なると思うのです。

**永田** 仏具店を経営している僕の場合、魚釣り以外なんもないかもしれんですけど（笑）、五島列島周辺地域の潮流のことや、季節の旬の魚の種類は一通り把握してますよ。漁協の講習会に呼ばれたりしているので、

**高木** 長崎の料理についていろいろ調べてみると、僕らの知らないことがいっぱいあったんです。正月は「長崎雑煮」、2月は金頭の煮付けなどの節分料理、それから、桃の節句・端午の節句・お盆の献立、くんちに食べる精進料理「お宮日の献立」など、長崎の行事食は実にバラエティ豊かです。和食の伝統を基本に、

雑煮に「唐人菜」、くんち料

この職員さんに教えるぐらいのことは、ちゃんと勉強しとるけん、できますよ。

**栗原** うちの連中も、外来の患者さんや訪問している対象者の方々を誘って、釣りに行ったりしています。ぜひ、いろんな魚のことを教えてください。

理に「柘榴」といった外国の食材を用いるところは、長崎ならではのと言えるでしょうね。

**永田** 節分のときに食べる金頭は、長崎では「ガッツ料理」って言うでしょ。ちよこつとしかない身を食べたあと、お湯をかけ頭をつぶして出汁にしてするのが、昔ながらの食べ方ですよ。

**高木** 長崎の郷土料理の勉強会を開くとか、僕らにも、

栗原先生の理想をカタチにするアイデアがあります。よく相談しながら、何が一番いいのか、できることからやっていければと思います。

### センターを活用し地域の発展に挑む

**栗原** 今年は、地域の方々と一緒に在宅支援リハビリテーションセンターを活用した取組みを、ぜひ行いたいと思っています。みんなが話し合う場所もありますし、昨年のくんちのエネルギーを考えたら、なんでもできそうです。

2025年問題に直面する前に、自分でできることはする。どうしてもできないことは、お互いに助け合う。「自助」と「互助」と言われていますが、これを真の意味で、この地域社会の基盤にしたいものです。

**永田** 銀屋町を活気あふれる町にしていきたいにも、長崎の人口減少をなんとかしても、くい止めなければ、自分らが動かないと何も動きませんので、この病院と施設を拠点にして、できる限りの協力をしていきたいと思っています。



### 栗原正紀

くりはら まさき 1952年、佐世保市生まれ。長崎大学医学部卒業後、長崎大学脳神経外科講師、十善会病院脳神経外科部長・同副院長、近森リハビリテーション病院院長などを経て、2006年、社団法人是實会理事長、2008年、長崎リハビリテーション病院院長、医学博士。



17:20 ST勉強会

業務終了後、毎月2回の基礎勉強会と3カ月ごとの症例検討会を行っています。今回の症例検討会では「高次脳機能障害」「嚥下障害」「失語症」の3グループに分かれ、発表者が、懸案となっている問題を提起し、グループごとに検討、アドバイスを行いました。

私たちと一緒に頑張りましょう

コミュニケーションが円滑にとれ、安全に食事を摂ることができるお口づくりのため、口腔ケア・ストレッチをします。



所属している病棟の申し送りに参加し、患者さま全員の状態を把握するなど、情報交換に努めます。

8:30

病棟申し送り



毎朝、その日出勤の言語聴覚士(ST)全員が、顔を合わせてスケジュールや入退院情報の確認などを行います。

8:20

朝のミーティング



おはようございます



話す、聞く、食べるのスペシャリスト

# 言語聴覚士の1日をレポート

「言語聴覚士」は、病気や事故などで言語、聴覚、発声・発音、認知などの、言葉によるコミュニケーションや飲み込みに問題を抱える方が、自分らしい生活を取り戻すための支援を行う専門職で、当院では現在、23人が働いています。



12:00

食事の支援



その人に合った食事のやわらかさや形、食べる環境づくりを行います。

13:00

VF検査  
(嚥下造影検査)



X線透視下で造影剤を飲んでいただき、「食べる機能」を調べます。

16:50

夕方のミーティング

フロアごとのSTが集まって、情報交換を行います。

16:30

病棟申し送り

こんなことも行っています。



VE検査  
(ビデオ内視鏡検査)

内視鏡を使って「食べる」機能を調べます。



失語症・高次脳機能障害の方を対象にした机上課題

計算をしたり、字を書いたり、言葉を喋ったり、その人に合わせた内容でトレーニングを行います。

しっかりとお支えします



# 誤嚥性肺炎とは?

食物、液体、胃の内容物などが気管や肺に入り込むことを誤嚥と言います。誤嚥した際に、細菌が唾液や胃液と共に肺に流れ込んだ場合に生じる肺炎が誤嚥性肺炎です。高齢者に多く、繰り返し発症しやすいのが特徴です。



**1** Question 誤嚥性肺炎ってどんな症状がでるの?

**1** Answer ●発熱を繰り返す ●痰が増える ●やせてきた ●食欲が落ちてきた ●ムセが増えてきた ●食事を食べにくそうにしている など

**2** Question どうしたら誤嚥性肺炎を予防できるのでしょうか?

**2** Answer  
口をきれいに保ちましょう。歯磨きをしないと口の中に雑菌が繁殖します。そのまま食事をすると雑菌と食事が混ざり、それが肺に入った場合には炎症を起こしやすくなります。  
食べる時には座って食べましょう。体が傾いていたり、寝たままの姿勢で食事をすると誤嚥しやすくなります。  
食事はゆっくり慌てず、良く噛んで食べましょう。急いで食べたり、一口の量が多くなるとムセの原因となります。  
食後は、2時間を目安に座って過ごしましょう。食事のあとはすぐ横になると、食べ物が逆流してしまう恐れがあります。



## 連載「鯨太鼓」に賭ける人たち

地元銀屋町が昨年秋、長崎の伝統神事「くんち」で7年ぶりに「鯨太鼓」を奉納しました。

一連の奉納が無事終わると、銀屋町は熱気が渦巻いていた



昨年10月9日夜10時頃、長崎くんのすべての奉納と庭先廻りを終えて鯨太鼓が銀屋町に戻ってきたとき、銀屋町は身動きが取れないほどの人であふれ、恐ろしいほどの熱気が渦巻いていました。その鯨太鼓奉納を統括したのが、長采である石橋正一郎さん(55)。

### 電話1本で長崎に戻る

「銀屋町でくんちの演し物を新しく作るから、帰ってこい」という1本の電話で仕事を辞め、東京から長崎に帰ってきた石橋さん。当時の練習場所は暗黒寺の駐車場でした。まだ細かいところまでは決まっていなかったため「掛け声はどうする?」などと話し合いつつ、一つひとつ作り上げていきました。担ぎ手も集まらず、知り合いに声をかけていきましたが、交代要員がわずか2人しか集まらず、くんちの3日間は担ぎ通しだったそうです。また、鯨太鼓をきれいに上げることができず、最初の奉納の時には「もう、二度と出さな」と言われるかもしれない、これが最初で最後の奉納かもしれない」という悲壮感すら漂っていたといいます。



昭和60年の奉納では据太鼓を外部の方に頼みましたが、2回目からは据太鼓も自分たちでやるうということなり、練習を始めました。最初はタイヤを叩くところからはじめ、太鼓を購入したあとは、太鼓の音で周りに迷惑がからないように稲佐山

## 其の式 銀屋町鯨太鼓 長采〈ながざい〉 石橋正一郎さん

まで行って練習を重ねました。風向きによって、福田や城山台など住宅地まで音が響いてクレームが来たことや、警察に通報されてパトカーが来たことさえありました。最初は「うるさかぞー」と怒って文句を言いに来た酔っぱらいが、太鼓の演奏を聞いて「頑張り」と激励に1万円を置いて帰ったエピソードもあったそうです。

### 子どもの成長が嬉しい

「くんちには多くの人たちが関わるので、考え方が異なる人たちもいます。でも、いい奉納をしたという気持ちみんな同じなんです。だから一つになれる。くんちの練習では、子どもたちだけでなく大人の大人も怒られます。くんちは子どもたちにとって、いい教育の場です。くんちに出た子どもが大きくなって声をかけてくれるのは嬉しいですね。小学生だった子が成人して一緒にお酒を飲んだりするのは楽しいですよ」

\*

歴史は浅いが、鯨太鼓は、銀屋町に暮らす人々の誇りとなっている。コミュニティが崩壊しているといわれて久しい現代社会にあっても、「自分たちの祭り」は、参加する人にとっても、見る人にとっても、心を一つにする大切なものなのだ。

国の重要無形民俗文化財・長崎くんち…「おくんち」の愛称で親しまれる諏訪神社の例祭(10月7・8日)は、380年の歴史を有し、勇壮な御神幸と国際色豊かな奉納踊りにより、日本三大祭と称されている。7年に1度、氏子区域58の踊町が演(た)し物と呼ばれるさまざまな演目(奉納踊)を奉納する。

# 「通所リハビリテーション銀屋通り」が1周年

昨年3月18日に「通所リハビリテーション銀屋通り」がオープンしてから、丸1年が経過しました。ご利用までの流れと1日の様子をご紹介します。

## 利用開始前

ご本人やご家族、担当のケアマネジャーから、「銀屋通り」を利用したいとの連絡が入ると、ご本人やご家族と話し合いの場を設けます。



**利用希望者のご自宅を訪れ、担当者会議**  
ケアマネジャー・他の介護サービススタッフとともに、ご本人に必要なサービスの内容や方向性を決め、目標を設定します。

担当者会議で決められた目標に対し、「銀屋通り」でどのような支援ができるかを検討します。通所リハビリテーション計画が決まり、利用者さまやご家族に納得いただけたら、契約を結び、ご利用が始まります。

## 利用開始



### リハビリ計画のご説明

初回は、ケアプランの目標に沿って立案されたリハビリ計画を医師が説明します。ご利用開始後は、定期的に医師が進捗状況を確認します。



夫婦でご利用のYさん



## 屋外での歩行練習

車と人が行き交うところや石畳を歩き、日常の歩行がスムーズにいくよう練習しています。

## 個別リハビリテーション

### 作業療法士



### 器具を使った練習



### 歩行練習

姿勢などに注意しながら、歩行距離を少しずつ延ばしていきます。



### 理学療法士

### 歩行練習

3カ月前まで寝たきりだったHさん。この日、3年ぶりに歩きました。歩行距離は2mでしたが、「5mは歩きた」と話していました。

### 言語聴覚士

### 発声練習



家族とも言葉でコミュニケーションが取れるように練習します。

## 自主練習



心をこめて♡ みんなでバレンタインのチョコレート作り

リハビリ計画に沿って、自主練習を行っていただけます。



羊毛フェルトを使った作品作り



マシントレーニング



上肢を使ったトレーニング

### 山登り再開を目指して練習に励むWさん



### Wさんの1日(2時間30分)

Wさんは山登りをしたいという目標があり、筋力アップ・体力増強・バランス力アップのトレーニングメニューをご自身で決めて実践しています。

1. 体温や血圧などを測って体調確認
2. マシントレーニング
3. 休憩 水分補給
4. マシントレーニング
5. 個別リハビリ

「昨年6月に手術を行い、退院後は別のリハビリ施設に通っていましたが、自宅の目の前に「銀屋通り」がオープンしたので、4月以降、週に3回、体力づくり、筋力アップ、バランスアップに励んでいます。体をほぐしたあと、マシン5種類を使って自主練習をしています。その間にはお茶を飲んで休憩したり、みんなと一緒に合同リハビリに参加したりしています。最後に理学療法士や作業療法士のサポートで、マットでストレッチなどをして帰宅します。通院当初、4点杖を使用していましたが、すぐにT字杖に変わり、家族ともども喜んでいきます。散歩の距離も伸びてきました。昔から山歩きが趣味で九州・円の山に登っていましたので、いつかまた山に登りたいですね」



### 患者さまの権利の尊重

患者さまにはどのような時・どのような状況においても、人として尊厳が守られる権利があります。その権利を大切に、患者さまが自己の意思で主体的に疾病や障がい克服していただくようにわたしたちは願っています。また、わたしたちは、患者さま・ご家族との信頼関係に基づいた「患者さま中心の医療」を実践していきたいと思っています。

#### 1. 最善の医療

患者さまには、誰でも、最善の医療を公平に受ける権利があります。

#### 2. 人格の尊厳

患者さまには、その人格・価値観が尊重され、一人の人間として医療を受ける権利があります。

#### 3. 納得と合意

患者さまには、病気・障がい・検査・治療・見直しなどについて、分かりやすい言葉や方法で納得できるまで、十分な説明を受ける権利があります。

#### 4. 自己決定権

十分な説明を受けた上で、患者さまは治療方法などを自らの意思で選択し、決定する権利があります。

#### 5. カルテの開示

患者さまには、自分のカルテの閲覧や複写、内容の要約や説明を受けるなど、診療記録の開示を求める権利があります。

#### 6. プライバシーの保護

患者さまには、受診に関わる個人情報を守られ、プライバシーを乱されない権利があります。

#### 7. 研究的医療

患者さまには、薬の治験(新薬の臨床試験)や治療法が確立されていない医療について、その目的や危険性など十分な説明を受けた上で、その医療を受けるかどうかを決める権利があります。同時にどのような不利益をも受けることなく、いつでもその医療を拒否する権利を持っています。

#### 8. 選択の自由「セカンドオピニオンを聞く権利」

患者さまには、民間、公的部門を問わず、担当の医師、病院あるいは保健サービス機関を自由に選択し、また変更する権利があります。